No.22

東京文化資源会議

［ティーチャ］

T-Cha

ニューズレター

東京文化資源会議
Tokyo Cultural Heritage Alliance

Satoru Kato × Kyoko Shibano × Sadaharu Egusa

@Jimbocho Cultural Planning Project

多様な文化を内包する広さと深さを持った町「神保町」のこれから

古書だけでないあらゆる文化を内包する多義的な町「神保町」

神田神保町の歴史を紐解くと、江戸時代末期は延焼防止の火除地や武家屋敷など広々とした空間がありました。幕末以降、東京大学の前身や日本大学、中央大学、明治大学ほか多くの前身校が開学し、「近代学問の発祥の地」となったことが現在の神保町の始まりです。当時、神保町には書店や映画館、寄席、劇場などまさに大学や学生を中心とした文化圏が広がり、さらに出版社や取次など出版関係の企業が集まり、現在の本の町へと発展してきたのです。

こうした歴史的背景から、昔も今も古書や貴重な雑誌を求めて神保町を訪れる人は後を絶ちません。百科事典を研究し大阪大学の研究員である加藤聡さんは、大学生、大学院生と神保町界隈で過ごし、「先生が『これは必携だ』という本を手に入れるために、神保町の書店を巡っていました」と、当時を振り返ります。

NEXT PAGE

有斐閣の江草貞治さんは九段にある高校に通っていたため、神保町は「遊びの町」の印象が強いという。神保町は本だけでなく楽器店、カレーやラーメン、老舗喫茶店など学生ならではの店舗、さらにスキー等のスポーツ店が多いのも特徴です。神保町は近代化とともに多くの外国人留学生が集ったことから「近代スポーツゆかりの地」の側面もあります。

近年では、スペシャルティコーヒーを提供するお店も増え、外国人観光客にも人気のエリアとして、老若男女、国籍を問わず東京の文化拠点の場所として人気を博しています。神保町は、様々な文化やコンテンツを受け入れる場所であり、それぞれに関心を持った人が、それぞれの興味の赴くままに集える場所が必ずある町、と言えるかもしれません。

町全体がミュージアム 神保町の楽しみ方

本の町として知られる神保町ですが、ネット販売や電書書籍の普及、中古市場の広がりなどから、実店舗で紙の本を求める学生は以前より減少してきたのは確かです。そこで、上智大学でメディア文化を研究している柴野京子さんは、現役の大学生らに神保町の魅力や面白さを知ってもらおうと、学生らを連れて神保町ツアーを行っているという。

「御茶ノ水駅から下り、すずらん通りから東京堂書店やシェア型書店のPASSAGE、レトロ喫茶もチラ見しながら最後は靖国通りの古本書店を巡る企画を10年以上続けています。町を通して出版文化の歴史やアーカイブを体感し、本の面白さを感じ取ってもらう機会にしています。

ツアー中に何冊もの古本を購入する学生や、店に入ったら隅から隅を見て回って何十分経っても出てこない学生も。若い人達の興味関心や知的好奇心をくすぐるきっかけになっています」（柴野さん）

古今東西、多種多様な本や文化的なコンテンツが集積する神保町。

加藤さんはこうした神保町の様子を「町全体がミュージアムであり、美術館や博物館を巡るように古書店や喫茶店に入ってほしいですね」と話します。

個人の興味関心を後押しする 間口の広さと深さが魅力

あらゆるジャンルや文化に触れることができるのが神保町の魅力です。昔も今も様々な人で賑わい活気に満ちています。

「神保町には、あらゆるジャンルと出会える間口の広さと、楽しいことを突き詰めようとするとどんどん奥まで行ける奥深さという二つの面白さがあり、長く深く楽しめる町。同時に、自分自身の核を持っていたり知りたいという欲求や何かを突き詰めたりするものがないと町は反応してくれません。誰しもが持つ興味関心や知的好奇心を刺激する魅力が神保町にはあります」（江草さん）

時に、なんでもありすぎるがゆえに、どのように探せばいいかがわからない、という声も。そんな神保町をガイドする人の存在や、レトロ喫茶のメニューとあわせて、飲食の歴史や料理に関する本が並ぶといった偶発性を生み出す仕掛けが必要なのかもしれません。

「神保町を深く知る書店員に質問するのもお勧めです。あらゆる知が集結した神保町だからこそ、知の伝道師である古本の書店員に聞いてみると、新たな発見や気づきが得られるはずです」（加藤さん）

夜の町をもっと楽しもう 神保町の新たな展開

東京文化資源会議はこの度「神保町の夜からはじめる」と題したプロジェクトを立ち上げ、神保町の文化資源を活かした新たな展開に取り組み始めています。

「プロジェクト名には、神保町の夜を考える、夜の神保町から自分の活動を始める、神保町の夜から他の地域に展開するなど、いくつかの意味を含んでいます。神保町の夜という時間を活かした新しい文化的な活動の拠点にできないかと考えています」（柴野さん）

神保町の商店は夜や週末にお店が閉まっており、利活用されていない資源が点在しています。こうした地域の資源に対し、若い人らの新しい挑戦を後押ししたり夜ならではの社交の場として活かしたりするなど様々なアイデアが考えられます。

神保町は西は新宿や渋谷、東は秋葉原や東京駅と主要な駅との交通の接続も良く、立地も含めて人が集まりやすい場所。町には、出版社だけでなくアートの学校やエディターズスクールなど作家を志す新たな才能の原石達が集う場もあるため、これまで以上に多様な学びの場が立ち上がることで神保町という町の文化資源を活かしたクリエーターの発掘や支援もできる環境が充実してきそうです。

こうした神保町という町のイメージの基盤には、出版や本という文化が寄与していることも忘れてはいけません。「本」という文化資源を基盤に、新たな神保町の可能性をいかにして拓くか。あらゆるジャンルを内包する広さと、町に幾重にも蓄積された文化の地層という深さの両面という町の良さを確保しながら、過去から現在、そして未来への文化を創造する器としての新たな神保町に向けた展開がはじまろうとしています。

（記事構成：江口晋太朗　撮影：鈴木渉）

Satoru Kato × Kyoko Shibano × Sadaharu Egusa

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議に関わる様々な専門家や実践家の方々が考える、
現在の東京、これからの東京について想像するための論考やエッセイをお届けいたします。

アーカイブを活用した食文化検索サービス
「食文化版ナップスター」の提案

Yoshiyuki Oshita
文化政策研究者 太下義之

テロワールとアーカイブ

アーカイブを活用して、その土地ならではの作物の情報とユーザーを結びつける新しい検索サービスの提案を試みたい。

特定の地域で継承されている在来作物は、地域の食文化の継承を担う「生きた文化財」として重要な役割を果たしている。フランス語で言う「テロワール（Terroir）」だ。「テロワール」は世界最大規模の都市である東京においても存在する。たとえば寺島ナス等の江戸東京野菜や、東京湾で夏場に相当数が獲れるものの低未利用魚である「アカエイ」等の江戸前の魚がその事例である。

その土地ならではの作物に関するアーカイブは、いくつかの地域で既に整備されている。たとえば、山形県鶴岡市においては市内で継承されている在来作物が60種類も存在しており、そのアーカイブは鶴岡市によって整備されている（＊1）。ただし、これらの在来作物は収量が少ないため収益も低水準であり生産効率が悪い。こうした理由で後継者の確保が課題となっている。

鶴岡市の取組事例

在来作物に関しては流通の課題もある。たとえば、地域住民や来外客にとっては在来作物や地元食材を食べられる場所がわからないという課題がある。また、飲食店が在来作物の料理を提供したいと考えても、どこに頼めば手に入るのかすら分からないのが現状である。

こうした課題に対応するため、鶴岡市では「在来作物需要創出事業」を2024年度から開始予定である。第一に「在来作物実態調査」によって生産の継続または拡大の意向を持つ生産者を把握する。これらの生産者のネットワークづくりを支援し、在来作物の継承へ向けた機運醸成を図る。さらに、在来作物の特性や価値についての情報を料理人に提供することで、生産者と飲食店のマッチングを図る予定だ。このような試みが軌道に乗れば、在来作物に関する情報と流通のプラットフォームが地域で形成されることになる。

現在の食の情報サービス

一方、ユーザーが飲食店を選択する際に利用する「グルメサイト」は、飲食店の情報を提供するアーカイブとして機能している。ただし、ほとんどのグルメサイトは「店」の情報が中核であり「食材」から検索することはできない。たとえば「今晩、出張先の金沢でノドグロの刺身を食べたい」と思ったとき、該当する店をダイレクトに検索できるサービスは存在しない。主要なグルメサイトの中では、ヒトサラ（＊2）が料理とその作り手である料理人から検索することができるのみである。

食文化版ナップスターの提案

以上、概観した通り、地域の食材に関して生産、流通、消費の各段階において課題がある。そこで、デジタルアーカイブ及びICTを活用した新しいビジネスモデルを提案したい。ここで参考になるのが「ナップスター：napster」である。

「ナップスター」は、P2P技術を用いた音楽の共有を主目的としたファイル共有サービスだ。1999年に米国でサービスが開始され、ユーザー数は世界で1億人を越えた。2000年に全米レコード協会などによって著作権侵害で敗訴し、結果としてサービスは停止された。しかし「ナップスター」は登録ユーザーが所有する音楽ファイル名等のメタデータによるアーカイブとユーザーを結びつけた画期的なサービスであった。特に流通とプロモーションに課題を抱えていたインディーズは「ナップスター」によって大いに隆盛した。

この「ナップスター」を参考に、食文化のアーカイブとユーザーを結びつけるビジネスモデルを提案したい。具体的な仕組みは次の通りである。すなわち、自治体は在来作物や低未利用魚の消費促進のため、生産者（農家、漁師等）と連携協定を締結する。当該自治体は、在来作物や低未利用魚の販売や料理の提供を行う地域内の飲食店や販売店を公募し、これらと生産者をネットワーク化する。生産者はデイリーの生産や水揚げの情報を入力し、それを元に料理店や販売店は入荷を決定する。自治体は、別途、食材（在来作物、低未利用魚等）や生産者に関する情報をアーカイブとして整備する。ここまでの段階は自治体の施策である。

以上のように、自治体によって食材、生産者、飲食店及び販売店に関する情報のプラットフォームが整備されることになる。あとはこれらの情報とユーザーを結びつけるサービスが必要である。従来の「店」を切り口とするグルメサイトではなく、地域の食材から飲食店や販売店を検索でき、さらにその食材に関する情報を入手できるサービスが必要だ。ここは民間の事業となる。すなわち本稿で提案する「食文化版ナップスター」とは、公民連携による情報サービスとなる。

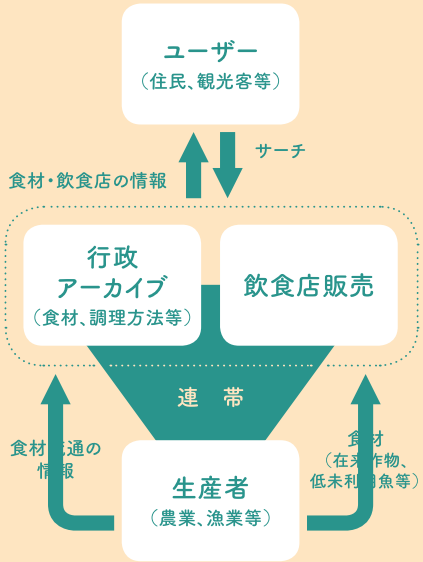
食文化版ナップスターの意義・効果

上述した「食文化版ナップスター」が整備されれば、地域にさまざまな効果がもたらされる。たとえば、従来は活用が低水準であった在来作物や低未利用魚の流通・消費が促進されると期待される。地域の飲食店にとっては、食材の調達が容易となるとともに、テロワールの魅力をアピールして集客増加につなげることができる。さらにガストロノミー・ツーリズムによる地域活性化も期待できる。

なお、日本のグルメサイトの中で最大手は「食べログ」であり、同サイトの店舗掲載数は全国85万件以上だ。これに対して本稿で提案している「食文化版ナップスター」は特定の地域の食材を対象とするため、対象エリアは自治体内、店舗数は数百程度を想定している。この規模ではビジネスとしての自走は困難であるため、立ち上げにあたっては自治体からの委託または助成が必要であろう。

かつての「ナップスター」がインディーズの楽曲とユーザーを結びつけたように、在来作物や低未利用魚のような、いわばインディーズの食材とユーザーを結びつけるサービスが必要であろう。本稿がその実現に向けて寄与できるのであれば幸いである。

食文化版napsterのイメージ



＊1 鶴岡市「生きた文化財『在来作物』」（https://www.creative-tsuruoka.jp/project/zairai）
＊2 ヒトサラ（https://hitosara.com/）

NOW TOKYO PROJECT

東京の未来に向けて多様なテーマで全10回開催しました

東京文化資源会議にて、2023年度から取り組んでいる、これからの東京という都市について考える「新東京ビジョンフォーラム」。今年度、最終的に10回の開催を実施いたしました。

第6回目では「東京の食文化の変遷」をテーマに、柏原光太郎氏（一般社団法人日本ガストロノミー協会会長）をゲストに迎え、議論しました。第7回目では、デジタルと都市の可能性について、東京大学の吉村有司准教授を迎え、オープンデータをはじめとした都市データの第一人者で当会議幹事の庄司昌彦がホストを務めました。

第8回目では、「観光まちづくりの未来」と題し、國學院大学にて観光まちづくり学部長を務める西村幸夫教授をゲストに、聞き手として当会議会長の吉見俊哉がホストを務め、これからの観光のあり方について思いを巡らせました。第9回目では、「ナイトライフを通じた都市の魅力と価値の創出」について、ナイトタイムエコノミー事業を推進するNEWSKOOLの鎌田頼人氏をゲストに、角川アスキー総合研究所所属で当会議幹事である玉置泰紀氏が聞き手として夜の可能性について意見を交わし、第10回目では「都市型農園が生み出す空間活用の可能性」と題し、兵庫県立大学大学院講師の新保奈緒美氏をゲストに、ドイツなど海外事例における都市型農園による土地活用のあり方について参加者と議論しました。

全10回のなかで多岐にわたるテーマを通じ、これからの都市のあり方や可能性について議論を重ねた本フォーラム、2024年度は企画内容を新たにブラッシュアップしながら、引き続き、都市の未来を対話する場をつくってまいります。

神保町の夜を活かす新たなPTが開始

新たに「神保町の夜からはじめる」というプロジェクトが始まりました。本の町・神保町の文化資源を活かしながら、夜という時間帯における新たな取り組みを通じて、神保町の新しい可能性を追求する活動です。神保町がこれまで以上に文化的な拠点として、様々な人達がつながる社交の場として、そして、出版文化の新たな展開を生み出すような成果を目指しています。

また、2024年5月5日開催のひじりばし博覧会において、「神保町」を全体のテーマとしたイベントも開催いたします。神保町の魅力やこれからの可能性について、様々な角度から考える場となります。ぜひご期待ください。

編集後記

雪の舞う三重の山間で梅の花を愛でた日。春はもうすぐそこまで来ています。そして、2024年度ひじりばし博覧会のテーマは神保町と書籍となりました。以前、スペイン植民地帝国が文書で世界を支配した様子を地理的に可視化したことがあります。書籍・紙は今も人間と文化の中心に存在します。しかし、メディアや発信者の多様化、低コスト化は文化を大きく変えていくものです。文化から生まれる文化資源も、多様な視点で捉えていく必要があります。ひじりばし博では、神保町という街の文化と書籍、そしてひとが織りなす多彩な世界を一緒に感じましょう。（陸）

2023年度、年間を通して開催した新東京ビジョンフォーラム、全10回が無事に開催することができました。毎回、様々なテーマに際して、専門家や第一線で活躍する実践者らをゲストに迎え、最新の事例や知見をお話いただき、それらを踏まえた有意義な議論や意見交換の場を行うことができました。同時に、都市を皮切りに、これだけの多様なテーマを内包し、しかもそれぞれの分野が有機的につながる様をみるに、まさに人間や社会の営みの豊かさや多様さを感じさせられました。引き続き、皆様と都市の未来について考える場を設けていきたいと思います。（江）

［ティーチャ］東京文化資源会議ニューズレター　No.22
渋み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会　デザイン：渋井史生(PANKEY inc.)　執筆：江口晋太朗(TOKYObeta Ltd.)
写真：鈴木渉　印刷・製本：スターツ出版株式会社　発行人：東京文化資源会議　発行日：2024年3月31日
〒110-0005　東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階　TEL：03-5244-5450　MAIL：info@tcha.jp　URL：http://tcha.jp/